



Data

監督：森淳一
脚本：森淳一／藤井清美
出演：吉岡里帆／高杉真宙／大倉孝二／浅香航大／酒向芳／國村隼／渡辺大知／柳俊太郎／松大航也／松田美由紀／田口トモロヲ

👁️👁️ みどころ

『見えない目撃者』とはそれ自体が論理矛盾だが、韓国版の名作『ブラインド』（11年）が、中国版の邦題と同じタイトルで邦画に！「見えない目撃者」と健常者の“目撃証言”は、どちらが信用できるの？その答えを「アレレ・・・？」と思わせる脚本は出色だ。

盲人だって、電灯を切り暗闇になれば、健常者と対等な格闘を！それを実践したのが、オードリー・ヘップバーン主演の『暗くなるまで待って』（67年）だったが、本作でも、後半からクライマックスにかけては、同じようなスリリングな展開に！

もっとも、日韓関係が最悪の今、韓中日3作の比較対照は、くれぐれも平等な目で！



■□■韓国版、中国版に続いて日本版が！■□■

盲人を主人公にしたハリウッドの名作は、何といてもオードリー・ヘップバーンが主演した『暗くなるまで待って』（67年）だ。目が見えないことは大変なハンディキャップだが、電灯を切って真っ暗にしまえば、健常者だって盲人だって、身体を張って闘う上では対等！同作のクライマックスとなる、暗闇の中での“格闘”はかなりの見モノだったが、さて本作は？

本作は『見えない目撃者』と題されているが、そりゃどこかで聞いたことがある。そう、私の大好きな中国映画『我是証人』（15年）（『シネマ37』190頁）の邦題が『見えない目撃者』だった。同作は、R18指定ながらも236万人の観客を動員し、主演したキム・

ハヌルが第48回大鐘賞映画祭で最優秀主演女優賞を受賞した韓国映画『ブラインド』(11年)の中国版だ。そもそも、目の見えない人(盲人)は“目撃者”になれないから、『見えない目撃者』は自己矛盾する言葉だが、盲人は健常者以上に触覚、聴覚、嗅覚等が鋭いから、意外に“見えない目撃者”の証言能力は高いのかも・・・？他方、「百聞は一見に如かず」とほごく目撃者は懸賞金欲しさのいい加減な証言かも・・・？そんなテーマで世間を騒がせている「女子大生連続失踪事件」の犯人像を特定していった中国映画『我是証人』のストーリーはメチャ面白いものだった。そんな面白い映画を、韓国や中国に独占させておく手はない。2019年9月現在、日本と韓国の関係は最悪だが、その分、日中関係は良好になっている。すると、韓国版(原版)の『ブラインド』の邦画化は難しいかもしれないが、中国版『我是証人』の邦画化ならオーケーかも・・・？そうかどうかは知らないが、とにかく韓国版『ブラインド』、中国版『我是証人』の日本版が今般誕生！

■□■前途有望な女性警官が事故で失明！弟も死亡！■□■

冒頭、前途有望な女性警官・浜中なつめ(吉岡里帆)が、出来の悪い弟・浜中大樹(松大航也)を車に乗せて帰宅中、ちょっとした弟とのイザコザ(?)のせいで対向してくるトラックと正面衝突する交通事故の様子が描かれる。それによって、なつめは完全に失明した上、愛する弟の命も失ってしまったから、なつめが人生に絶望したのは仕方ない。なつめは今、盲導犬のバルを頼りに母親・浜中満代(松田美由紀)と2人で暮らしていたが、母親と一緒に弟のお墓参りに行くこともできない状態だ。もちろん、警官の仕事も依願退職していたから定職もないらしい。

中国版では、パトカーに弟を乗せ、車に手錠でつないだ状態で連れ戻そうとしたため、「車を止める、止めなければ・・・」と叫びながら何が何でも脱出しようとした弟との間でトラブルが発生した中での交通事故だったから、「そこまでやるか!」「いくらなんでも、こりゃやりすぎ!」という問題点もあった。しかし、日本版はそこまでハードな設定ではないから、この事故は決してなつめのせいではない。しかし、それでもなつめの落ち込みと人生の絶望感は相当なものだ。しかし、ある日の晩、バルと共に家路を急いでいたなつめが、後ろから来た車に接触されると・・・。これも中国版でば“にわか雨、タクシー、順番待ち”といういかにも中国的なハードな設定から物語をスタートさせていたが、日本版のそれは常識的。しかし、そこでなつめが“目撃”したものは・・・？

目が見えなくなつて、健常者以上に触覚、聴覚、嗅覚が鋭く、かつ記憶力、分析力、推理力があれば・・・。

■□■目撃証人が2人！さて、警察はどちらを重視？■□■

中国版では、にわか雨の中でヒロインがタクシーの順番待ちをせざるを得ない姿を、いかにも「今でもこれが中国!」というマナーの悪さで描き、その中で起きた交通事故と誘

拐事件を観客に提示していた。しかし、邦画の本作ではその点を少し簡略化(?)し、盲導犬を連れて帰宅中のなつめが、偶然車と接触する事故を起こしたものの、コトなきを得て別れた後のなつめの目撃証言が本作のテーマになっていく。あの車の運転手とは言葉を二言三言交わただけで別れたが、その後よく考えてみると、大きなラジオの音の中だったが、後部座席からは助けを求める少女の声らしきものが……。また、運転手の口からは微量だが、アルコール臭も……。こりゃ、ひょっとして悪質な少女誘拐事件かも……?

中国版では、懸賞金目当ての別の目撃者が登場していたが、本作ではなつめが苦労して現場にいたもう一人の目撃者を捜しだすストーリーが描かれる。それがスケボーに没頭している遊び人高校生の国崎春馬(高杉真宙)だが、国崎はあの車の運転手と直接話をしたにもかかわらず、後部座席には人はいなかったし、少女の声も聞こえなかったと証言。それに対し、なつめは、「あの車はハッチバックだから見えなかったのだ」等の反論を加えたが、国崎は「運転手がマスクで顔を覆っていた」ことをハッキリ見ている“目撃証人”だから、警察官がなつめではなく、国崎の証言を信用したのは仕方ない。運転手がマスクをしていたと聞いたなつめは、マスクで曇ったメガネを吹くためのスプレーにアルコール臭がしたのだと理解したが、それを説明しても国崎も警察官も納得しなかったのは残念だ。他方で、家出少女の捜索願いも出されていなかったから、このままでは少女誘拐事件は立件することはできず、お蔵入りに……。

■□■ 定年間近なればこそ、立派な仕事を！ ■□■

弁護士登録をした1974(昭和49)年4月、私はすぐに大阪国際空港公害訴訟弁護団に入った。当時の司法界は“青法協問題”で揺れており、裁判官は自由な発言ができなくなっていたうえ、個々の判決についても最高裁からの“統制”が厳しくなっていた。そのため、当時の最新の理論が集中していた大型公害訴訟では、それを担当する各地裁の裁判官の統制が強められ、定年間近にならなければ本当に自分が納得する判決が書けないという雰囲気が充満していた。そんな中、1975年11月に下された大阪国際空港公害訴訟の控訴審判決は、私たちが目指す「飛行の一部差し止め」を認める内容だったから万々歳！しかし、そこでは「それは裁判長が定年間近だったため」との説がまことしやかに語られていた。しかして、本作には定年を間近に控えた長者町警察署刑事一課・強行犯係の木村(田口トモロヲ)が登場する。さて彼は、捜査打ち切り直前の少女誘拐事件について、いかなる取り組みを……?

彼の上司である高橋係長(酒向芳)は係全体を率いて行かなければならないから、効率第一を考えるのは仕方ない。したがって、いくら定年間近とはいえ、木村が打ち切り直前の少女誘拐事件に首を突っ込むことを良しとしなかったが、この2人は出世のスピードこそ違え同期の桜だったから、耳元で「頼むよ……」とささやかれると……。

さらに、既に警察を定年退職し、今は悠々自適の生活をしている元刑事・平山(國村隼)

に、担当した15年前の猟奇事件を聞きに行くと、そこから木村の頭の中に見えてきたものは・・・？

■□■犯人はあいつだ！悪徳警官を追う警官たちは？■□■

サイコ・スリラーの「誘拐もの」では、犯人は変質者と相場が決まっているが、この変質者の定義は難しい。また、往々にして変質者はあなたの身近にいることも多いから、要注意だ。本作では、なつめがいくら若い女性の拉致誘拐事件だと主張しても、それらしき女性の搜索願が出てこない限り警察が事件を立件できないのは仕方ない。しかし、女の子の名前がいわゆる源氏名で呼ばれていたり、風俗系で働いていれば、本名での搜索願が出ていないのはむしろ当然だ。その上、もし搜索願を受け付ける警察の側に、それを自由に細工する悪徳警官がいたら・・・？本作後半からハイライトにかけて浮上してくるそんな悪徳警官が、長者町警察署生活安全課・少年係の日下部翔（浅香航大）だから、後半以降はこの男のサイコぶりに注目！

他方、前述した定年間近の木村刑事は、今やなつめの「見えない目撃者」としての価値を十分に認めていたから、この2人の情報交換はバッチリ。また、あの時マスクの男から金を受け取っていたことをなつめから白状させられた国崎も、今はなつめの協力者になっていたから、風俗関係者からの聞き込みもバッチリ。更に、木村に続いて刑事一課・強行犯係の吉野直樹刑事（大倉孝二）も協力するようになっていた。その結果、「救（キュー）様」と呼ばれていた、風俗スカウトマンの男・桐野圭一（柳俊太郎）が捜査線上に浮かび上がっていたが、犯人はいかにもサイコ的なこの男・・・？それとも・・・？さあ、そんな後半の推理と探偵の物語はあなた自身の目でしっかりと。

■□■ここまで見せるか！R18指定 vs R15指定■□■

少女誘拐事件を計画的に次々と実行するようなヤツは変質男。世の中を震撼させた猟奇誘拐事件をテーマにした『コレクター』（65年）をはじめとして、世間の相場はそう決まっている。しかし、そんな変質男の犯人像は映画によっていろいろだ。中国版のそれは、ある事件でかわいい妹を失った、本業が整形外科医の男だったが、さて本作の犯人像は・・・？

その対比も不可欠だが、韓国版はR18指定だったのに対して、本作がR15指定とされていることの対比も不可欠。『セブン』（95年）では、キリスト教における「7つの大罪」がテーマとされていたが、本作では、誘拐犯が少女たちを誘拐するについて、「六根清浄」のおぞましい儀式が登場するので、それに注目！六根清浄とは仏教の言葉で、身心に功德が満ち自在に働けるように、感覚と認識の基礎となる眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を清浄にすること。仏教では、修行や種々の浄行によってこの六根清浄が得られるとしているらしい。ところが、犯人はこれを曲解し（？）、執着を断って、心を清らかな状態にす

るためには、不浄なものを見ない、聞かない、嗅がない、味わわない、触れない、感じないようにするために目、口、鼻、脳等を切り取るという残虐な儀式を行っていた。誘拐した少女たちはそのために活用されていたから、必要な少女の数は当然6名・・・。

そのため、本作後半ではそんな残虐なシーンがモロにスクリーン上に登場してくる。それが本作がR 15指定とされた原因だ。道教的な要素をふんだんに取り入れた中国映画ならそれもわかるが、邦画の本作で、森淳一監督はなぜ六根清浄のそんなおぞましい儀式(?)にそこまでこだわったの？

■相次ぐ警官の犠牲は見るに耐えないが・・・■

本作では、当初からなつめの「見えない目撃者」としての優秀さが目立つのに対し、警察内部の統制不足(?)が目立っている。何より誘拐事件は証拠不十分のため立件せず、とされたのだから、いくら定年間近とはいえ木村が勝手に捜査を続けることはそもそもあり得ない。したがって、なつめと木村が協力して犯人捜しに動くストーリーが不自然なら、生活安全課の刑事である日下が容疑者として浮上してくるストーリーも不自然だ。もちろん、そんな木村刑事がたからこそなつめの「見えない目撃者」としての証言が生きたし、その後の推理も裏付けられていったわけだが、少なくとも犯人像が浮かび上がった後は正式に警察全体が組織として対処すべきが当然だ。しかるに、それが面倒だったのか、それとも被害者の一刻も早い救済のみに目がいってしまったのか、ベテラン刑事であるはずの木村が単独で犯人の追及に向かったのは如何なもの。その結果、木村は・・・？

また、本作のクライマックスの舞台は、犯人が被害者たちを閉じ込め「六根清浄」の儀式を行っている大きな洋館になる。この場所を「特定」したのもなつめだが、なつめと国崎と共にそこに到着した吉野刑事は、そこに停めてあった桐野の車を発見したため、正式に本部に応援を要請。これで応援が到着し、一斉に踏み込めば、犯人の逮捕、被害者の救出は間違いなしだ。ところが、そこでも吉野は早く被害者を救出しなければ、の思いで一人拳銃を構えて洋館の中に入っていったために、アレレ・・・。このような相次ぐ警察官の犠牲は、結果論ではなく、組織のあり方として見るに耐えないものだ。したがって、そんな脚本は少し欠点があると言わざるを得ない。さらに、吉野を助けなければ、と吉野に続いて、なつめと国崎が2人で洋館の中に入っていき姿を見ていると、更にアレレ・・・。この姿も、見るに耐えないが・・・。

■ハードな追跡劇は序の口、本番の格闘は洋館の中で！■

今は何でもスマホを活用する時代だから、「地図を片手に」という風景はなくなり、「スマホを片手に」となっている。それはなつめも同じで、目が見えないなつめにもスマホは必需品らしい。しかして、本作後半には、犯人から命を狙われて追跡されるなつめが、とっさにスマホで春馬と連絡を取り、なつめのスマホに映る映像を見せながら、春馬がなつ

めの逃げる方向を指示するというスリリングな逃走劇が登場するので、それに注目！もつとも、私はこれはいささかやりすぎでは？と思ったが、本作ラストのクライマックスではさらに、犯人が根城にしている洋館の中で、なつめと春馬VS犯人で、『暗くなるまで待つて』を彷彿させる追いかけっこ格闘劇が展開されるので、それにも注目したい。

電灯を壊して、部屋全体を暗くしてしまえば、視覚障がい者も健常者と対等。オードリー・ヘップバーンと同じように(?) そう考えたなつめは、暗闇を利用し、音や触感を頼りに犯人と対峙したわけだが、さて、その勝敗は？この展開も私には少し違和感があったが、それなりに興味深いモノなので、韓国版、中国版のクライマックスと対比しながら、それをじっくり楽しみたい。

2019 (令和元) 年9月30日記